

今後の活動

今後の知働化研究会の活動は、具体的には未だ決まっていますが、少なくとも今のあゆみを止めることはありません。研究会は、このところ研究会誌の議論をするために毎月開催してきましたが、今後は、少なくとも2ヶ月に1回程度の研究会本来の姿での開催になっていくと思います。その中で、新たな考えが生まれ、熟成され、形になっていくことでしょう。知働化研究会誌第3号の発行がいつになるかは、未だ何とも言えません。

どのような研究領域にも言えることですが、理論と実践との両輪が必要であり、それぞれの探求を進めていかななくてはなりません。大きく二つの方向があると考えています。

- 「創造」に焦点をあてた哲学・科学・工学の探求
- ソフトウェアに関わる実践を通じて「新たな世界」をつくる

前者の創造性の探究については、『知働化の最前線』（山田正樹氏：知働化研究会コンセプトリーダー）で述べられているように「認知」や「思考」、そして、コトバ・ソフトウェアといった事項がテーマになっていくでしょう。この方向性は、『アーキテクトとは』（濱勝巳氏）、『知平/ソフトウェア参謀（ブレイン）』（大槻）なども同様の問題意識を共有しています。

一方で、上記「実践」については、各人の仕事やビジネス上の活動に負うところが大きいのですし、むしろ、実践活動の中で得られた知見や知恵を昇華させたものを理論にフィードバックしていくことが重要です。しかしながら、ソフトウェアに関わる仕事を社会の中で明確に位置づけ、認知・評価されていくようにしていくこ

とも、とても大切なことです。今後、こういったソフトウェアに関する「新たな世界」を社会の中で位置づけていく活動も推進していこうと考えています。

知働化研究会は、アジャイルプロセス協議会の一つのWG(ワーキンググループ)としてスタートしたわけですが、協議会の中での活動を超えて、スロープロセス、新しいソフトウェアづくり、人工物のデザインなどの広範な領域も視野に入れていく必要があります。探求していく課題やテーマも、人材、プロセス、マネジメント、アーキテクチャ、テクノロジーなど多岐にわたっていくことでしょう。さらには、こういった領域やテーマを活かしていく社会的な仕組みも検討していかななくてはなりません。

その中で我々(私)が注目しているのが、「アーキテクト」です。来たるべきソフトウェア社会でアーキテクトの果たす役割は、ソフトウェアやその作用がもたらされる世界を新たに生み出すことであり、その中での人々の関わり方をデザインしていくことです。その意味で、現状のアーキテクトと呼ばれている人々は、実態として調整やマネジメントに明け暮れており、本来の仕事を行い、その評価を得る(リスペクトされる)状況からは程遠い立場におかれているように思えます。こういった不条理から脱していくための探求・コミュニティ活動・仕組みづくりなどを知働化研究会として推進していくことを検討しています。

知働化研究会誌をご覧になって、上記のような活動に参加してみたい方は、是非知働化研究会にご参加いただければ幸甚です。

大槻 繁
知働化研究会運営リーダー
兼 研究会誌編集担当
八ヶ岳の紅葉を見ながら
2015 年晩秋

